

錢形平次捕物控

金色の處女

野村胡堂

青空文庫

これは錢形平次の最初の手柄話で、この事件が平次を有名にしたのです。この頃お静はまだ平次の女房になつて居ず、ガラツ八も現はれては居りません。

一

「平次、折入つての頼みだ。引受けてくれるか」

「へエ——」

錢形の平次は、相手の眞意を測り兼ねて、そつと顔を上げました。二十四、五の苦み走つた好い男、藍微塵あゐみぢんの狭い袷あはせが膝小僧を押し隠して、彌造やざうに馴れた手をソツと前に揃へます。

「一つ間違へば、御奉行 朝倉石見守あさくらいはいのかみ様は申すに及ばず、御老中方に取つても腹切り道具だ。押付けがましいが平次、命を投げ出すつもりでやつて見てはくれまいか」

と言ふのは、南町奉行與力の筆頭笹野新三郎ささの、奉行朝倉石見守の智恵囊ちゑぶくろと言はれた程の人物ですが、不思議に高貴な人品骨柄です。

「頼むも頼まないも御座いません。先代から御恩になつた旦那様の大事とあれば、平次の命なんざ物の數でも御座いません。どう

ぞ御遠慮なく仰しやつて下さいまし」

敷居の中へゐざり入る平次、それをさし招くやうに座布團を滑り落ちた新三郎は、

「上様うへさまには、又また雑司ざふしヶ谷やの御鷹たか狩がりを仰せ出された」

「エツ」

「先頃、雑司ヶ谷御鷹狩の節の騒ぎは、お前も聞いたであらう」
「薄々は存じて居ります」

それは平次も聴き知つて居りました。三代將軍家光公が、雑司ヶ谷鬼子母神きしもじんのあたりで御鷹を放たれた時、何處からともなく飛んで來た一本の征矢そやが、危ふく家光公の肩先をかすめ、三つ葉葵あふひの定紋を打つた陣笠の裏金に滑つて、眼前三步のところに落ちた

といふ話。

それツ——と立ちどころに手配しましたが、曲者の行方ゆくへは更にわかりません。

後で調べて見ると、鷹の羽を矧はいだ篋のぶか深の眞矢ほんやで、白磨き二寸あまりの矢尻やしりには、松前のアイヌが使ふと言ふ『トリカブト』の毒が塗つてあつたと言ふことです。

「その曲者も召捕らぬうちに、上様には再度雜司ヶ谷の御鷹野を仰せ出された。御老中は申すに及ばず、お側の衆からもうろくかんげん諫言を申上げたが、上様日頃の御氣性で、一旦仰せ出された上こんりんざいは金輪際變替は遊ばされぬ。そこで御老中方から、朝倉石見守様へ直々のお頼みで、是が非でも御鷹野の當日までに、上様を遠

矢にかけた曲者を探し出せとのお言葉だ。何とか良い工夫はあるまいか」

一代の才子笹野新三郎も、思案に餘つて岡つ引風情の平次に縫すがり付いたのです。

「よく仰しやつて下さいました。御用聞冥利みやうり、この平次が手一杯にお引受け申しませう。就ては旦那、私が聞き度いと思ふことを、皆んな隠さずに仰しやつて頂けませうか」

「それは言ふ迄もない事だ。何んなりと腑ふに落ちない事があつたら訊くが宜い」

「ではお尋ねしますが、上様を雜司ヶ谷のお鷹野に引付けるのは、何にか深い仔細しさいが御座いませう。小鳥の居るのは雜司ヶ谷ばかり

ぢや御座いけません。目黒にも桐ヶ谷にも千住にも、この秋はこと
の外獲物えものが多いといふ評判で御座います。それが何うしたわけで

——

「これく、段々聲が高くなるではないか」

「へエ——、でもこれが判らなかつた日には手の付けやうが御座
いません」

「話すよ——、薄々世間でも知つて居ることだ——、雑司ヶ谷の
鷹野の歸り、上様うへさまには決つて、大塚御藥園へ御立寄りになる。

あの中に新築した高田御殿で、一と椀わんの御藥湯を召上がるのが、
きつとお樂しみだ」

「と申すと」

「世上の噂でも聞いたであらう。御薬園預りの本草家、峠宗^{ほんざうか たうげそ}

壽軒^{うじゆけん}の娘お小夜は、府内にも並ぶ者なしといふ美人だ」

「さうで御座いますつてね、上様もまつたくお安くねえ」

「コレコレ、何を申す」

「へエ——、だが、有難う御座いました。それだけ伺へば大方筋はわかります。仔細あつて私もお小夜の顔ぐらゐは存じて居りますが、あの女は何うして——一筋縄でいける雌^{めす}ぢや御座いません——、宜しう御座います。乗るか反^そるか、平次の出世試し、命にかけてもやつて見ませう」

平次の若々しい顔には、感^{インスピレーション}興にも似たものがサツと匂つ

て、身分柄^{へだた}の隔りも忘れたやうに、胸をトンと叩いて見せました。

「お鷹狩の日取りは明後日だ。あさってぬかりはあるまいが、そのつもりで——。拙者には拙者の工夫がある。油斷くちをすると、手柄比くらべにならうも知れぬぞ」

「へエ——」

二人は顔を見合せて、會心の微笑を交かはしました。與力と岡つ引では、身分は霄壤てんちの違ひですが、何にかしら此二人には一脈相通ずる名人魂があつたのです。

二

大塚御藥園、一名高田御藥園といふのは、今の音羽の護國寺の

境内にあつたもので、一萬八千坪の中に有名な藥師堂、しんのうだう神農堂をはじめ、將軍臨場りんぢやうの時の爲に、高田御殿といふ壯麗なる御殿まで出來て居ました。

そうひのき總檜の破風造り、せいどうがはら青銅瓦の鑄も物々しく、數百千種の

藥草靈草から發する香氣は、ふくいく馥郁として音羽十町四方に匂つたと言はれるくらゐ。幕府の御藥園の權威は大したもので、素より岡ツ引や御用聞などの近付ける場所ではありません。

與力笹野新三郎の屋敷を飛出した錢形平次、いきなり大塚へ飛んで來て、この藥臭い堀にへバリ付きましたが、場所が場所だけに、何う工面しても入り込む工夫が付かないのです。

丸半曰、氣のきかないあきすねら空巢狙ひのやうな事をしてゐた平次も、

その日の晝頃には、到頭シビレをきらしてしまひました。

「チエツ」

舌打を一つ、袂たもとから取出したのは、その頃通用した永樂錢えいらくせんが一枚です。手の平へ載のせて中指の爪と親指の腹で弾くと、チン——と鳴つて、二三尺空中に飛上がりまゝ。落ちて來るところを掌で受けると、これが其儘錢ぜにうらなひ占。

「歸れつて言ふのか、よし」

錢を袂に落すと、其儘堀を離れて、音羽の通りへ眞つ直ぐに踏出しました。これが錢形平次といふ綽名あだなの出たわけの一つ。もう一つ、平次には不思議な手練があつて、むづかしい捕物に出會でつくはすと、二三間飛退つて、腹巻から銅錢なべせんを取出し、それを曲者の

面體目がけてパツと抛り付けます。薄くて、小さくて、しかも一寸重い鍋錢ですから、不用意に投げられると、泥棒や亂暴者などは、キツト面體をやられます、ひるむところを付け入つて捕る、このこつはまことに手に入つたもので、錢形の平次といふと、年は若いが悪黨仲間から鬼神きしんの如く恐れられたものです。

その平次が見限つたのですから、御藥園の塀の中の祕密は容易のことではありません。腹立ち紛れまぎの彌造こさを拵へて、長い音羽の通りを、九丁目まで來ると、ハツと平次の足を止めたものがあります。目白坂の降口に、紺暖簾こんのれんを深々と掛け連ねて、近頃出來乍ら、當時江戸中に響いた『唐花屋たうばなや』といふ化粧品屋、何の氣もなく表へ出した金看板を讀むと、一枚は『——おん藥園へちま

の水——』次のは『——南蠻なんばん祕法ひはふ、おん白粉——』そして更に
もう一枚には、『——峠流たうげりう祕薬ひやく色々——』とあります。

「これだツ」

平次は思はず顎を引きました。

三

「お静しず坊居るか」

「あら親分」

その頃東西の兩國に軒を並べた水茶屋の一つを覗のぞいて、平次は
斯う聲を掛けました。

「よう、相變らず美しいネ。罪だぜ、お靜坊^{しんぱう}」

「あら親分、そんな事を言ふなら、私は嫌」

「どつこい、謝まつた。逃げちやいけねえ、今日は大眞面目に頼み事があるんだ。靜^{しん}ちゃん^{ちゃん}は、近頃評判の音羽の唐花屋^{からなや}へ買物に行つたことはないか」

「いゝえ、朋^{ほう}輩^{ばい}衆で唐花屋へ行かない人はない程だけれど、私^{わたし}はまだ行つたことはありません」

「さうだらうねえ、お前ほどの容貌^{きりやう}ぢや、へちまの水にも南蠻渡來の白粉にも及ぶめえ」

「あれ、親分さん」

なるほどこれは美しい容貌^{きりやう}です。精々十七八、血色の鮮^{あざ}やか

な瓜實顔に、愛嬌あいけうがこぼるゝばかり。襟の掛つた木綿物に、赤前垂をこそしめてをりますが、商賣柄に似ず固いが評判で、枝から取り立ての果物くだもののやうな清純な感じのする娘でした。

「實は少し無理な頼みだが、半日暇をもらつて、唐花屋まで買物に行つて貰ひ度いんだが、何うだらうネ、静い坊」

「え、え、行つて上げるワ」

何んと言ふわだかまりのない返事でせう。

「そいつは有難てえ、それちや御意の變らぬうちに——」

岡つ引と水茶屋の娘ですが、どちらも水際立つた美男美女で、二人の胸には、何時の間にやら淡い戀心あはが芽ぐんできたのでせう。兎に角話の運びの早いことは大變です。

兩國から小日向^{こびなた}まで駕籠、そこからわざと歩いて、唐花屋の入口に着いたのは彼これ西刻^{むつ}近い刻限でした。髪形をすつかり堅氣の娘風にしたお靜の後姿——黄八丈^{きぢやうあはせ}の袷^{あはせ}と緋鹿^{ひか}の子帶^{おび}が、唐花屋の暖簾^{のれん}をくゞつて見えなくなつた時は、大日坂^{だいにちざか}の下から遠く様子を見て居た錢形の平次も、さすがに眼の前が眞つ暗になるやうな心持がしました。唐花屋がどうといふ、突き留めた疑ひがあるわけではありませんが職業的第六感とでも言ひませうか、——此儘お靜を犠牲^{いけにへ}にするのではあるまいか——と言つた豫感が、平次の頭をサツとかすめて去つたのです。

「へちまの水を下さいな」

お靜は一向そんな事を構ひません。物馴れた調子で日傘を畳み

乍ら、店がまちへもう腰を下ろして居ります。

「へエ、いらつしやいまし。丁度今年採^とつたばかりの新しいのが御座います。これ徳どん、其處からお入れ物を持つて來てお眼にかけな」

美しい客と見ると、馴れて居る筈の店中も、何となくザワついて、二三人の番頭手代が、磁^{じしやく}石に吸付けられる鐵片のやうに、左右から寄つて參ります。

「それからアノ、白^{おしろい}粉も貰つて行きませう」

「へエ〜」

「それにお紅も」

おほたば
大東な事を言つて、お靜はソツと店中に眼を走らせました。

近頃出來の店構へで何となく眞新らしい普請ふしんですが、その癖妙に陰氣で妙に手丈夫に出來ているのが、娘の纖デリケート弱な神經を壓迫します。

「お茶を召し上がつて下さいまし」

若い丁稚でつちが、店使ひにしては贅澤過ぎる赤繪あかゑの茶碗ちやわんに、これも店使ひらしくない煎茶せんちやをくんで、そつとお靜の傍にすゝめました。

「有難うよ」

身扮みなりに相應した堅氣の娘なら、此茶は飲まなかつたかも知れませんが、お靜は水茶屋の女で、お茶を汲くむことも汲ませることも馴れて居ります。桃色珊瑚さんごを並べたやうな美しい指でそつと受け

て、馴れた様子で一口、二た口。

「オヤ——？」

お茶にしては妙に甘い、そして香氣が可怪をかしいと思ひましたが、三口目には綺麗に飲んでしまひます。

それから口の小さい素焼すやきの徳利とくりへへちまの水を詰めさしたり、

白粉と紅とを取揃へたり、お鳥てうもく目を出さうとして帶の間へ手を

やつた時は、先程から我慢して居た恐ろしい眠氣ねむけが急に襲おそつて來て、性も他愛もなく美しい島田鬻がガツクリ前かたむへ傾かたむきました。

「徳どんは外を見張れ、お前は手を貸せ」

大番頭が立ち上がつて指圖をすると、馴れた様子で、バタバタと不思議な作業が始まります。

「ヘツ、こいつは全く掘り出し物だ」

「シツ」

二人の若い手代に抱き上げられたお静は、死んだもののやうになつて、赤い裳と白い脛とが、ダラリと下にこぼれます。

音羽の通りは暫く絶えて、大日坂の下には、宵暗に光る眼、銭形の平次は全く氣が氣ぢやありません。

四

此時はじめて平次は、近頃江戸中で評判になつた美しい娘が、頻繁に行方不明になることに思ひ當りました——芝伊皿子の荒

物屋の娘お夏、下谷竹町の酒屋の妹おえん、麻布笄町あやぶづがいで御家人の娘お幸かう——、數へて見ると、此秋になつてからでも三人ほど姿を隠して居ります。それも選り拔きの美人ばかり、書置も何んにもないから、まるで神隠しに逢つたやうなものです、それが早くて三日目、遅くとも七日目には、二た目とは見られぬざんさつ慘殺死體となつて、川の中、林の奥、どうかすると往來の眞ん中に捨ててあるといふ始末です。

南北町奉行は、配下の與力同心に命じ、江戸中の御用聞を總動員して、この惡鬼のやうな犯人を探させましたが、何としてもわかりません。犯人がわからないばかりでなく、何の目的で選り抜きの美しい娘ばかり殺すのか、皆暮れ見當かいくも付かないのです。そ

の上死體は、洗ひ落してはあるが、歴々ありくと全身に金箔きんぱくを置いた跡あとがあります。

「これだく」

錢形の平次は一人うなづ頷きながら、宵闇の中をすかして、唐花屋からはなやの裏口から出て行く駕籠の後を追ひました。その中にお靜が入れてあることは最早疑ふ餘地はありません。

駕籠は無提灯むぢやうちんのまゝ、音羽の裏通りを眞つ直ぐに、今の護國寺、その頃の大塚御藥園の裏門へ、吞まれるやうに入つてしまひました。

「矢張りさうだ」

平次は此儘引返して、笹野新三郎に報告した上、御藥園へ手を

入れさせようかと思ひましたが、御藥園の見識^{けんしき}は大したもので、若年寄直々の指令を受けなければ、町奉行では手の付けやうがありません。そんな事で暇取つて居る内に、お靜の命が絶たれては一大事。

「先づお靜を助けよう」

後で考へると、それは多分盲目^{まうもく}的になりかけて居た、平次の戀心がさせた思案でせう。前後の考へもなく木蔭^{こかげ}の土堀に手が掛かると、平次の身體は軽々と堀を越えて、闇の御藥園の中へポンと飛込んでしまひました。

それから何刻經つたか、何處を何う通つたかわかりません。一萬八千坪の御藥園の中、茯^{ふくりやう}苓、肉桂^{にくけい}、枳殼^{きこく}、山査子^{さんざし}、吳茱^{ごし}

蔞、ゆゆ 川芎、せんきう 知母、ちほ 人蔘、にんじん 茴香、ういきやう 天門冬、てんもんとう 芥子、からし イモ
 ト、フナハラ、ジキタリス——幾百千種とも數知れぬ藥草の繁る
 中を、八幡知らずにさ迷ひ歩いた末、僅かの灯を見付けて、眞黒
 な建物の中へスルリと滑り込んでしまひました。

それは多分有名な高田御殿だつたでせう。兎に角、非常に宏壯
 な建物で、人目を忍ぶにはまことに好都合です。廊下から部屋へ、
 納戸へ、梯子段はしごだんへと、人と灯あかりを避けて拾つて居るうちに、何時
 の間にやら平次は、天井裏の密閉した一室へ入り込んで居ります。
 ハツと思つて出口を探しましたが、何んな仕掛があつたか、四
 方一様に檜かしの厚板で、戸や窓は愚かなこと、蟻の這ひ出る隙間も
 あらうと思へません。

「チエツ、勝手にしやあがれ」

度胸を据ゑてドツカと坐ると、不思議なことに、床板の彼方此方から、大きく小さく、下の大廣間の灯が漏れて居ります。

よく見ると、それは悉くギヤーマンを張つた穴で、この天井裏から、下の様子を覗く爲に出來たのでせう。——これは後で見ると、悉く下の大廣間の格天井に描かれた、天人の眼や、蝶々の羽の紋や、牡丹の蕊などであつたと言ふことです。

五

最初平次の眼に入つた光景は、廣間の中央に祀られた、何とも

形容のしやうのない醜惡怪奇を極めた魔像まぎやうで、その前と兩側には、眞つ黒な蠟燭ろうそくが十三本、赤い焰をあげてメラメラと燃えて居ります。

魔像の前には蜥蜴とかげの死骸、猫の腦味噌なうみそ、半殺しの蛇と言つた不氣味な供物くもつが、足の高い三方に載せて供へられ、その供物の眞ん中に据ゑた白木の大俎板おほまないたの上には、ピチピチした裸體が仰向に寝かされて、その側には磨ぎ立てた出刃庖丁が、刃を下にしてズブリと板の上に突つ立つてゐます。

「アツ」

さすがの平次も、思はず唇を噛みました。俎まないたの上の赤ん坊は、泣きも叫びもせず、好い心持さうにニコニコしてゐるのが、四方あたり

の陰慘な空氣の中に、不思議な對照を描き出して、身の毛のよ立つやうな氣味の悪い情景です。

突然、今迄聞いた事もないやうな、陰慘な合唱と共に、一隊の男女が、妖魔の行列のやうに廣間へ入つて來ました。いづれも眞黒な覆面、その間から、眼ばかり光らして、覆面越しの讀經の聲も、何んとなく陰に籠ります。

續いて燃え立つやうな眞紅の布を纏つた四人の女が、一人の娘を伴れて現はれました。夢見るやうな足取りで、無抵抗に臺の上に押し上げられたのを見ると、こればかりは町娘の服裝をしたお靜の囚はれの姿だつたのです。

「あツ、到頭」

あまりの事に平次は、もう少しで聲を立てるところでした。人間の力で此密室が押し破れるものだつたら、何處かの羽目を踏み^ふ砕^{くだ}いても飛出したであらうが、それとても出来ないことです。

又、一としきり奇怪な讀經が湧き起つて、魔像とお靜の四方を、^{あたり}黒装束の人間の輪が、クルクルと廻り始めました。

それから暫く續いて、廣間は元の靜寂に還ると、不意に、人間の輪はサツと散ります。見ると、臺の上に立つたお靜は何時の間にやら、^{くろしやうぞく}黒装束の人間達の手で、十七乙女の若々しい肌へ、ベタベタと金箔^{きんぱく}を置かれてゐるところだつたのです。お靜は魂の抜けた人形のやうに、少し仰向き加減に突つ立つた儘、なすが儘に任せて身動きもしません。

やがて乙女の上半身に金箔を置き終ると、黒衣長身の長老とも見える男は、黒頭巾の覆面を取つてお靜の前に近づきました。

「あッ」

平次はもう一度聲を立てるところでした。その男といふのは、地獄變相圖から抜け出した、惡鬼のやうに恐ろしく映つたでせう。

「――」

續いて覆面を除つたのは、この藥園の預主、峠宗壽軒です。半白の中老人で、立居振舞に何となく物々しいところがあります。

二人は前後して進んで、金箔きんぱくを置いた乙女をとめの肩へ唇を觸れました。續く黒装束の五、六人も、悉く覆面こことを外して、同じやうに

乙女の身體へ唇の雨を降らせます。

この冒^{ばうとくてき}流的な行^{ぎやうほふ}法^{ぽう}が、どんなに平次を怒らせた事でせう。

お静の清^{きよ}らかさを救ふ爲に、どんな事をしても——とあせりましたが、此密室はどんな設計で出来たものか、一刻^{ふたとぎ}あまり探し抜いても、どうしても入った場所がわかりません。

その内に、下の廣間が又賑かになりました。と見ると、焰のやうな赤い布を纏った、半裸體の四人の美女は、人面^{じんめんじうしん}獸身の魔像と、金箔を置いたお静を中心にして、あらゆる狂態を盡して亂舞を始めたのです。

魔像の前の大^{おほ}香^{かう}爐^ろには、幾度もく異香が投げ込まれました。

天井裏でそれを嗅ぐと、平次の心持も、うつらく夢見るやうに

なります。

幾度か醒めては、廣間の様子を覗き、幾度か氣を喪つては何刻となく深い眠に陥ちました。——これではならぬと——滿身の力を兩の拳にこめ、兩眼を見開いて氣を勵ましましたが、泥酔した人のやうに崩折れて、その努力も永くは續きません。

金色の處女——お靜の上に加へられる、あらゆる辱かしめと、怪奇至極の大儀式が、斷片的に平次の眼と耳に焼き付けられながら、そのまゝ遠い／＼過去の出來事のやうに、他愛もなく消えて行きます。

明くれば十月九日、三代將軍徳川家光は近臣十二名を徒へ、微^し行^{のび}の姿で雜司ヶ谷へ鷹狩に出かけました。十二人の内四人は將軍と同じ装^{よそほ}ひをした近習連、四人は鷹^{たかしやう}匠、あとの四人は警衛の士で、微行とは言ひ乍ら、此時代にしては恐ろしく手輕です^{もつと}。尤もこれは家光自身の命令で、目障りになるやうな士卒は、間近に置かれなかつたまでのこと、音羽から小日向、大塚へかけては、何千とも知れぬ警護の士で、蟻の這ひ出る隙間もなく固めて居ります。

此日はことの外不獵^{ふれふ}だつたせるか、家光は恐ろしく不機嫌で、近習達とろく／＼口も利きません。鷹狩が済むと、待ち構へて居

たやうに音羽へ下つて、大塚御藥園の高田御殿へお入りになります。

御藥園の門前に迎へたのは、峠宗壽軒、五十がらみの總髮たうげそうじゆけんで、元々本草家で武士ではありませんが、役目ですから、麻あさがみ袴しもを着けて將軍を高田御殿へ案内します。

奥の間、贅ぜいを盡した調度の中に納まると、近習達も遠慮をして、將軍を存分にくつろがせなければなりません。高麗縁かうらいべりの青疊けふそくの中、脇息もたに凭れて、眼をやると、鳥の子に百草の譜ふを書いた唐紙、唐木に百蟲の譜を透し彫すかぼりにした欄間らんま、玉を刻んだ引手や釘くぎ隠しまで、此部屋には何となく、さり氣ないうちに漂ふ一抹まつの怪奇さがあります。

此時、女の童に襖を引かせて、茶碗を目八分に捧げて入つて來たのは、峠宗壽軒の娘お小夜です。あけぼのいろ曙色に松竹梅を總縫した小袖、町風に髪を結び上げた風情は、ながつぼね長局風俗に飽々あきくした家光の眼には、どんなに美しいものに映つたでせう。年の頃は二十二三、少しふけて居りますが、その代り町家にも武家にもない、したゝ滴るやうな美しさがあります。

恐るゝ色もなく、家光の前に進んで、近々と茶碗を進め、二三歩返つて、

「お藥湯を召し上がりませ」

わだかまりもなく言つて、うつむき俯向加減に莞爾にっこりします。こんな無禮な仕打は、日頃の家光には見ようつたつて見られません。大

名が廊くるわがよ通ひに夢中になつたやうに、將軍家光が雜司ヶ谷の鷹狩に夢中になつたのも無理のないことです。

「――」

家光は黙つて茶碗を取り上げました。本草家峠宗壽軒せんの煎じた藥湯、別に何の藥と言ふでもありませんが、神氣を爽さはやかにして、邪氣じやきを拂ふ程度のもの、唇のところへ持つて行くと、高價な藥の匂ひがプーンとします。

七

天井裏に閉ぢ籠められた錢形の平次、幾刻――いや幾日眠らさ

れたかわかりません。フト眼を覺すと、四方はすつかり明るくなつて、天井裏乍ら埃のほこりの一つ／＼も讀めさうです。怪奇な舞踊を思ひ出して、嘔氣はきけを催すやうな不愉快な心持になりましたが、お靜あんびの安否が心もとないので、もう一度ギヤーマンの穴から覗くと、廣間は廣々と取片付けられて、白日の光が一杯にさし込み、忌はしい物など影も形ありません。

思ひ直して出口を深すと、今度はわけもなく見付かりました。壁は同じやうな檜の厚板で張り詰めてありますから、一箇所だけ手摺てずれがして、出入口といふことは直ぐわかります。暫く押したり叩いたりして見ると、どうした弾みはすか、いきなりスーツと開きます。多分扉の下の踏み板に仕掛があつたのでせう。

一足漲るやうな白日の光りの中へ飛出しましたが、困つたことに、庭にも廊下にも、廣間にも玄關にも、夥しい人間がたかつて居て、天井裏から飛出したまゝでは、大手を振つて出て行くわけに行きません。

「あツ、いけねえ。今日は上様お鷹狩の日だ」

霞んだやうな平次の頭にも、これだけの記憶が蘇つて來ました。今日までに毒矢の曲者を捉へる筈だつたのが、天井裏に閉ぢ籠められてすつかり豫定が狂つてしまつたのです。

「こいつはしまつた」

平次は天井裏で地團駄を踏むばかりです。

それから又何刻か経ちました。御殿の中の空氣は遽に緊張して、

「上様うへさまのお着き」

といふ囁きが、隅々までも行ゆき互わたります。

上様お着きと言ふのは、お鷹野は無事だつたといふ證據にもなりますから、天井裏の平次もそれを聞いてホツとします。

「間違ひがあれば、この御殿内だ。よし、それならば、まだ望みがある」

暫く泥棒猫のやうに、天井から天井へ、梁はりから梁へと渡つて歩いた平次、何時の間にやら、羽目からスルリと抜け出して、離れひさしの廂の下に這ひ込んでしまひました。首を少し曲げると、一枚開け放つた障子の中に、上段の高麗縁かうらいべりが見えて、豊かに坐つた黒羽二重の膝も見えます。

「上様だツ」

平次はヒヨイと首を引きました。と同時に小夜が捧げた薬湯の茶碗が見えます。

やがて家光は薬湯を手に取り上げた様子、それと同時に平次の眼には、もう一つ動くものが映ります。うっそれは障子の外に、物の限のやうに踞まつた總髪の中老人、あられこもん霰小紋の袴を着て、折目正しく兩手について居りますが、前夜怪奇な行法を修した、この薬園の預主、たうげそうじゆけん峠宗壽軒に違ひありません。

家光が茶碗を取り上げて、唇まで持つて行くと、宗壽軒の唇が歪んで、障子を射通すやうな瞳が、キラリと光ります。

「あツ、どくたう毒湯だツ」

捕物の名人、錢形平次には、外の人でない第六感が働きます。

前後の事情から考へ合せて見ると、家光の手に持つて居る茶碗の中に、正面な藥湯が入つて居るわけはありません。
まとも

笹野の旦那が呉々も頼んだのは、これだツ。

平次はいきなり廂から飛出さうとしましたが、高が岡つ引、將
ひさし

軍様の前へ飛出せるわけもなく、大きい聲を出さうにも、其邊の物々しいたゞずまひを見ると、うつかり騒ぎを大きくして、相手に棄鉢すてばちに出られると、反つて恐ろしい事になりさうです。それに毒湯と思ふのは、平次の單なる疑ひで、實は本當の藥湯を勸め
すゝ
て居るのかもわからないのです。

ハツと氣が付いて腹巻を探ると、折悪しく鍋錢なべせんはありません

が、小粒が二つ三つ。と、それに柄にもなく小判が一枚あります。其頃のをとゝひ小判は大變な値打で、岡つ引などに取つては一と身代ですが、一昨日を笹野新三郎から用意のために手渡された金、將軍様の命にかは關らうと言ふ場合ですから、物惜みなどをして居る時ではありません。

いきなり小判を右手のおやゆび拇指とひとさしゆび食指との間に立てて、小口をつば唾で濡らすと、錢形の平次得意の投げ錢、山吹色の小判は風をきつて、五、六間先の家光の手にある茶碗のいとぞこ絲底に發矢とはつし當ります。藥湯は飛散つて、結構な座布團も疊も滅茶々々。

「――」

家光は動ずる風もなく、おもて面をあげて小判の飛んで來た方をきつ屹と

見やります。

「あツ」

驚いたのはお小夜、起ち上がると、いそくと近寄つて、藥湯に濡れた家光の膝へ、身體と一緒に、總縫ひ松竹梅の小袖を、サツと掛けました。

八

「これ、何をする——」

あわてて居住ひを直す家光の膝を追ふやうに、お小夜は袖の上へ顔を伏せました。

次の瞬間には、

「贗者にせものツ」

と弾はじき上げられたやうに起ち上がります。

「漸やうやく氣が付いたか」

「エツ、口惜くやしい、お前は誰だえ」

飛退く女の帶際を猿臂ゑんぴを延ばしてむんずと掴にんだ偽家光。

「與力笹野新三郎、上様の御座を拜借して、其方親娘おやこの企たくらみを
見破りに参つたのだ。神妙にしろ」

と、高い聲ではありませんが、ツイ調子に乗つて名乗りを上げてしまひました。

これが非常に悪かつた——と言ふのは、障子の外で、深怨しんゑんの

眼を光らせて居た峠宗壽軒、娘の聲にハツと驚いたところへ、續いて笹野新三郎の名乗りです。思はず起ち上がるのへ冠かぶせて障子の内から、

「父上ツ、露見ろけん——早く、早く、地雷火ぢらいくわツ」

と娘のお小夜が悲痛な聲を絞ります。

「おツ、娘、さらばだぞツ」

ヒラリと縁側から飛降りると、廂ひさしの上から錢形平次が、パツと飛付くのと一緒でした。

「野郎ツ、何處へ失せやがる」

素より捕物の名人、寸毫すんがうの隙すきありませんが、困つたことに

宗壽は思ひの外の剛力で、それに平次は、まる二日物を食はない

上、廂から飛降りる機はずみに足を挫くじいて、進退駈引自由になりません。

「エツ、面倒」

二人はそれでも負けず劣おとらず捻ねぢ合ひました。あまりに咄とつ嗟さの出来事で、遠ざけられた近習達が、驅け付ける暇もなかったのです。

そのうちにお小夜の背がバラリと解けました。錦の厚あつ板いたの一と抱かゝへどあるのが、笹野新三郎の手に残ると、お小夜は脱兎だつとの如く身を抜けて、

「父上、地雷火は私がツ」

「お、娘頼むぞツ、あの犠いけに牲へも逃すなツ」

親娘は最後の言葉を交すと、總縫ひ松竹梅の小袖は、大鳥のやうにサツと奥へ飛込みます。

犠牲と聞いて平次は驚きました。捨鉢になつた宗壽軒父子が、地雷火で高田御殿を吹き飛ばすとなると、あの可哀さうなお静の命は一たまりもありません。金箔きんぱくを置いて一度は祭壇に載せた處女をとめの身體は、いづれあの廣間の何處かに隠してあるに相違ないでせう。

「笹野の旦那、此奴を頼みます」

「お、心得た」

その内に遠慮して遠退いて居た近習達も、騒ぎを聽いて駆け付ける様子。平次は猛然として突つかゝつて来る宗壽軒を、一つか

はして芝生の上に叩きのめすと、身を退いてサツとお小夜の後を追ひました。挫くじいた足首は、焼金を當てるやうに痛みますが、今はそんな事を言つて居る場合ではありません。

勝手を知つた大廣間の中へ入ると、プーンと鼻を衝く煙硝えんせうの匂ひ、地雷火の口火は早くも點けられたのでせう。

今更事の危急ききいふな勢ひに、平次はゾツと總毛立ちましたが、お靜を匿かくした場所はまるで見當が付きません。

「お前は錢形平次、もう駄目だよ。一緒に死ぬばかりだ」

呵から々と氣違ひ染みた笑ひを突走らせるのは、黒髪も衣紋も滅

茶々々に亂した妖婦お小夜、金きん泥でいに荒海を描いた大衝立おほついたての前に立ちはだかつて、艶やかに邪よこしまな眼を輝かせます。

「やい、女、あの娘を何うした」

「知らない」

「いや、知つてゐる筈だ、言へツ」

「言はない、——どうしても言はない。私達をこんな破目に陥し込んだのはお前だらう。——その代りお前の名前を譚言^{うはご}に言つて居るあの娘は、この御殿と一緒に木葉微塵^{こつばみぢん}に碎け散るよ。好い氣味だ、——あれはお前の情人^{いろ}だらう。知らなくつてさ、——お、もう口火は燃えきつた。ホ、ホ、ホ、ホ」

「いや、俺はお靜を助けて見せる」

「馬鹿なツ」

荒海の衝立、怒り狂ふ紺^{こんじやう}青の波^{なみ}頭^{がしら}を背にして、小袖の

前を掻き亂したまゝ、必死の笑ひに笑ひ狂ふ美女の物凄さ。物慣れた平次も、思はずタジタジと退すきりましたが、次第に激しくなる煙硝の匂ひに、もう一度氣を取り直して、毒蛇の眼の如きお小夜の瞳を、精魂こめて凝ぢつと見詰めました。

「解るまい、もう最後だ。それツ」

「いや、解つた」

何を考へたか平次は、猛然としてお小夜の身體に飛び付きました。細腕を取つて引退け、荒海の衝立をサツと前へ引倒すと、その背後にあるのは『御藥草』と書いた御用の唐櫃からびつ、力任せに蓋ふたをハネると、中から燦さんとして金色無垢こんじきむくの處女をとめの姿が現はれます。

全身に金箔きんぱくを置かれたお静は、半死半生の儘此中に入れられて、捨てるか殺されるかする最後の運命を待つて居たのでした。

「あッ、それを助けては」

後ろから縫すがり付くお小夜を蹴返けかへして、金色の處女を小脇に痛む

足を引摺つて外へ飛出す平次、——それと同時に、

轟ぐわうぜん然——天地も崩るゝやうな物音。

天ちうに冲する火焰の中に、高田御殿は微塵みぢんに崩くづれ落ちてしまひました。

九

これは後でわかつた事ですが、たうげそうじゆけん 峠宗壽軒の前身は、するがだ 駿河大納言忠長いなごんたづながの臣で、本草學の心得があるのを幸ひ、京都に行つてその道の蘊奥うんあうを窮めきは、身分を隠して大塚御藥園を預るまでに出世したのです。

主君忠長自殺の後は、何んとかして、家光うらみに怨を報じようと、高田御殿の中に祭壇さいだんを設けてまう、中世はやに流行つた惡魔サタンを祭神とする呪法じゆはふを行つたのでした。その祭に夥おびたずしい犠牲いけにへを要するところから、腹心の者に命じて、音羽九丁目に唐花屋からはなやといふ小間物屋を出させ、江戸中の美女を釣り寄せては、その内でも優れた美人を誘拐かどはかして犠牲いけにへにし、連夜ひそかに惡魔の呪法じゆはふを修ずして將軍家光を調伏てうふくする計畫だつたのです。

それも埒らちが明かないと見て、近頃は毒矢どくやを飛ばしたり、娘お小夜の美色みさきを餌えさに、毒湯をすゝめて一舉うちきりに怨うらみを報じようと思いました
が、奉行の朝倉石見守いはみのかみが老中に進言して、將軍家光に面差おもざしの
似た與力笹野新三郎を替玉に使ひ、見事にその裏を搔かいて取つて
押へたのでした。

峠宗壽軒は詮議中に自殺してしまひましたが、娘のお小夜はそれつきり何處へ行つたかわかりません。

大塚御藥園は、その後間もなく取潰とりつぶしになり、天和元年てんな護國寺建立の敷地として召上げられた事は人の知るところです。

錢形の平次はこれだけの仕事をして、將軍の命を狙ふ怨敵をんてきを平げましたが、笹野新三郎に約束したお鷹野以前に曲者を擧げる

ことが出来なかつたのと、事件の性質が性質なので、表向はその
 手柄に酬むくいられませんでした。併しかし、家光の胸に錢形平次の名が
 印象深く記憶きおくされた事と、金色の處女をとめ——お靜の愛を確しつり掴つかんだ
 ことだけで、若い平次は満足しきつて居りました。

青空文庫情報

底本：「錢形平次捕物全集第二十二卷 美少年國」同光社

1954（昭和29）年3月25日発行

初出：「オール讀物」文藝春秋社

1931（昭和6）年4月号

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ヶ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※題名「錢形平次捕物控」は、底本にはありませんが、一般に認識されている題名として、補いました。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：門田裕志

2014年1月1日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

錢形平次捕物控

金色の處女

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 野村胡堂

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>